

未来学と次世代と



滋賀県立大学環境科学部

教授 土屋 正 春

環

環境問題、この四文字が眼に入らない日はないほどに私たちの社会は環境に気配りを必要としています。

しかし、このことは次第に「環境」という言葉が表す意味内容の範囲が拡張の一途をたどっている、とも言えるでしょう。

考えるテーマが「公害」から「環境」に代わってきていることは、誰でも強く感じているに違いありません。この変化の典型的な例として、「まちづくり」という観点の登場を挙げることができます。要約すれば、自分たちの暮らす町の将来展望をはぐくみ、その実現のために市民と事業者、そして行政がそれぞれの立場で参加するということなのですが、それだけにまた世代を超えた取り組みが必要なことは明らかです。

環境のあり方を考えることが、いわば未来学としての意味合いを

強くするようになるにつれ、若い世代をどう育てていくのかという次の主役へのバトンタッチについて、今の大人はどれくらい注意をはらっているのでしょうか。

ロンドンにある市民団体「グラウンドワーク」の事務所を訪ねたときに強く感じたのは、次世代に向き合う姿勢でした。何にでも使われる大きめの部屋が日常的な集まりの場になっていますが、小さな子どもも退屈しないように展示などにも工夫がされているのです。実際に、打ち合わせに集まってきたメンバーは子ども連れで、そうした子どもたちに、若いメンバーが展示を見せながらクイズなどで遊んでいました。

市民参加という言葉は次第に定着しつつあります。しかし、次のステップをどうするかという課題は待つてはくれないのです。

